

## 夢か現実か創造性を膨らませてくれる舞台。

なにもかもが新鮮な気持ちで日が近づくにつれて高揚しているのを感じていた。  
この企画を知らされたのは馴染み深く普段から共感することの多い方。驚きと不安が交差した。驚きが新鮮であり、高揚が不安でもあった。

3月8日金曜日、19:00 開演。富山オーバード・ホールエントランスは30分前には行列。  
小劇場であれば大盛況。

オーバード・ホール「ステージオンシアター」。馴染みのある客席を縦断しステージ上へ。  
センターに立ち止まり客席の四隅を舐めるように見渡す。あらためて素晴らしいホールであることを実感。

ステージ奥には暗幕が吊り下げられている。  
ステージを横切るように上手袖へ一旦入って暗幕の裏側へ。そしていよいよ会場客席へ。

今までに経験したことのない空間。シアター形式の客席はすでに7割ほどが埋まっていた。  
センター後方の席に座り周りを見渡す。ステージ配置、照明の位置、客席一つ一つに備え付けられたイヤホン。このイヤホンがこの作品のポイントであることがわかった。そして目は客席の裏側へ、「こういうことか」と同時にステージの奥行きの高さと広さにあらためて新鮮さを感じた。

会場入りしてから10分ほどでほぼ満席に。来場者からは緊張感のようなものが伝わる。オール富山ということもあり近親者、友達が関わっているからなのか。来場者に標準語の方も多かった。まもなく、私は全てが初体験の異空間にいることがわかった。

会場案内の方の説明でイヤホンを耳につける。イヤホンの配線をあらためて見直し設置した方の苦労したであろう事が伝わる。私の高揚感が高まる。高揚感は不安ではなくワクワク感に変化していた。

オープニング、ライブハウスのような迫力とクリアーなBGMで一気に引き込まれた。ステージ上のセットに照明があたる。美術セットの隅々まで目を配るととても素人の作りには見えない拘りの素晴らしい舞台が浮かび上がっていた。

舞台の上部には映像が映し出される。自分の頭の中の想像が映し出されている。

話の設定はいつの時代なのだろうか。現代か近い将来なのか。昔は賑わっていた街が今は廃れた街の中にある一軒の食堂が舞台。腕利きアル中マスターがひっそりと営業している。マスターは失望感に支配された現代の私たちのようだ。

混沌とした現代社会を彷徨う 1 人の若者。イヤホン型の小型無線機を渡されマスターから料理手順が伝えられる。若者はなにかに引きずり込まれるように料理をすることに。お店はやがて繁盛するが若者はなにか見えない力によって支配されているようにも思えた。

お店に来る客は紛れもなく現実の生活感のある人達である。自信に満ちた若者が作る料理からは現実の香りが漂ってくる。客との会話も現実的な会話が繰り広げられる。全てが現実的なのである。

19:00 開始の舞台を観る客としては空腹感という現実が。生姜焼きの味が体を支配していた。

戦争により多くの犠牲者を出した街。そこには良質な音で流れる英語版の「ドナドナ」。ヨーロッパでも戦争により多くの犠牲者を出した悲壮感漂う音が心に残った。

若者の欲望なのかマスターの欲望なのかどこか昭和チックな雰囲気的女性と交わる。若者には大切な女性がいる。欲望に負けてしまう。その女性はマスターのことを知っているのか自らが誘い込むように若者を虜にしてしまう。

若者の使命感なのかマスターや街の人たちの思いなのか自らの手で人を傷つけてしまう。そして、本当に大切な女性が犠牲になってしまう。

多くの人が変わることで街は出来上がる。人との交わりが薄れて廃れる。または街が廃れたのは人ではなく何か別なものなのか。

レビューを書き始めて 3 日。まとまらない。  
終演から続くムヤムヤ。答えの見つからない結末からなのか。

終演後にタニノ氏によるトークショーを観ることができた。「後々まで尾を引くような鑑賞体験は他に類をみない。」という説明に納得。

演劇に答えはなく人それぞれの解釈で良いのである！  
見慣れている観客も見慣れていない観客も心に残る作品。

最後に関係者は企画段階、制作発表から上演の間までに多くの苦勞されたことだろう。心から拍手を送りたい。

寶島 政博 (富山県富山市)